ジョセフ・グルーとその時代
廣部泉著『グルー――真の日本の友』

（ミネルヴァ書房、2011 年）

井　口　治　夫

ジョセフ・グルーは、歴代の駐日米国大使のなかで、1990 年までの 11 年間同職を務めたマイク・マンスフィールドに次いで長い在任期間（1932 年から 1942 年）であった。しかもペリー来航以来の日米関係で最大の転換点であった日米開戦時に最前線で米国外交を推進した。マンスフィールドのような米国政界の大物とは対照的な、職業外交官出身者でしかも 1920 年代と太平洋戦争中米国務省の中枢で国務次官として重要な外交問題や行政上の案件に携わったという特筆すべき足跡を残している。

廣部泉著『グルー――真の日本の友』（ミネルヴァ書房、2011 年）は、グルーに関する最重要先行研究であるウォルドー・ハインリックスの著書[1]とは補完関係にあり、しかも、後者が書かれた時期に公開されていなかった一次資料や刊行されていなかった二次資料を駆使したことで、[2]この先行研究と並ぶグルー研究の最高傑作である。ハインリックスのグルーに関する伝記の内容の 56 パーセントほど（原書ベース）が日米関係について考察しているの対して、廣部氏の『グルー』は、内容の 76 パーセントほどが日米関係にページ数を割いていることからわかるように、彼の伝記は、駐日大使時代から太平洋戦争終結までのグルーに重心を置いている。この箇所は、ハインリックスの伝記を内容面で乗り越えている。

グルーは戦前の米国社会のエリート教育の最高峰であった全寮制私立男子校グロトン・スクール（いまの日本でいう中高一貫のような私立校）で学んでいる。同校は、1884 年 J・P・モルガン1世の寄付などにより創設された新設校であったが、創設者のエンディコット・ピーバディーは、英国社会で指導的立場になる子弟を育てるイートンやラグビーといった英国パブリック・スクールを真似て、ボストンから 60 キロ離れた原野にキリスト教精神に基づく文武両道と質実剛健を志向する教育を実現していったのであった。ピーバディーは、裕福な家庭の出身であった生徒たちに、恵まれた環境で育った彼らは、社会の弱者や恵まれない立場にある人々を助け、また、より良い社会を築くべく社会をリードしていく責務があるという考えを、キリスト教精神に基づき厳格に叩きこんだのであった。ピーバディーは、米国監督教会の牧師であったが、彼はボストン近郊のセーラムの非常に裕福な貿易商・旧家の出身であった。

---

[1] Waldo Heinrichs, *American Ambassador: Joseph C. Grew and the Development of the American Diplomatic Tradition* (Boston: Little, Brown and Company, 1966). ウォルドー・ハインリックス『日米外交とグルー』（麻田貞雄訳、原書房、1969 年／増補改訂版『グルー大使と日米外交』グルー基金、2000 年）。

[2] ただし、ミネルヴァの評伝シリーズとして刊行されているため、脚注がないことが惜しまれる。

廣部が本書の冒頭で家系図を交えながら紹介しているように、グルーは、ボストンの大変裕福な綿貿易商の旧家に生まれた。廣部が指摘するように、グルーの叔父ヘンリーは中国貿易で財をなし、その娘ジェーン、つまり彼の従姉妹の結婚相手は、モルガン投資銀行の当主J・P・モルガン2世であった。グルーの結婚相手アリス・ペリーは、オリバー・ペリー提督の孫であった。オリバー・ペリーは、日本を開国させたマシュー・ペリーの兄で、第2次米英戦争（1812年から1814年）の英雄であった。ちなみに、フランクリン・ルーズベルトの母方の祖父は、対中貿易で財をなしており、エンディコット・ピーバディーの曽祖父も同様であった。なお、エンディコット・ピーバディーの父親は、J・P・モルガン1世（前述モルガン2世の父親）の父親の貿易・金融会社の共同経営者であった。

新設の私立学校であったグロトンは、大恐慌と第2次世界大戦という世界史と米国史の一大転換期の大統領であったフランクリン・ルーズベルトを輩出した。ルーズベルトにその生涯で両親に次いで最も影響を与えた人物が、エンディコット・ピーバディーであった。廣部が指摘するように、グルーも、ピーバディーの強烈な教育的影響を受けた。グルーは、グロトンとハーバードでルーズベルトの2期先輩で、ハーバードの学生新聞「クリムソン」で両者は、時期は違うものの、上級編集員を務めていた。学生新聞は、フルタイムの仕事に近いこともあり、両者のハーバードにおける成績は、日本の成績でいうと「可」が大変多かった。[3)]

グルーやルーズベルトのほか、グロトン出身者で、本書と関わりの深い人物として、彼らとは一世代若いW・アベレル・ハリマンとディーン・アチソンがいる。ハリマンは、父親で鉄道王のエドワード・ハリマンが日露戦争終結時に日本が取得した南満洲の鉄道権益を共同開発すべく来日したさい、アベレルら家族全員を連れて来日していた。日比谷焼き打ち事件などを目撃したハリマン一家は、グロトンでの始業式より後に帰国するつもりで、ハリマン夫人は、ピーバディー校長にそのことを打電していた。ところが、ピーバディーの返電は、始業式に間に合わない場合、アベレルとその弟は退学に処するという回答であったため、ハリマン夫人は子供たちを連れて急きょ始業式に間に合わすべく帰国したのであった。終戦時駐ソ大使であったハリマンと国務次官であったグルーのアジアにおけるソ連に対する脅威の認識を廣部は紹介しているが、アベレル・ハリマンにとってのアジアでの最初の脅威は、ピーバディーの権威主義と厳格な教育方針であった。[4)]

アチソンが、グロトンへ入学した年、ハリマンは、両親とともに、訪問していた。アチソンとハリマンは、同校とイェール大学のボート部で先輩・後輩の関係にあり、二人は、

---

3) Paul K. Conkin, *The New Deal* (London: Routledge, 1968), 9; Paul K. Conkin, "Franklin D. Roosevelt and the New Deal," in *American Scene* (New York: Meredith Corporation, 1971), 363-64; Geoffrey C. Ward, *Before the Trumpet: Young Franklin Roosevelt, 1882-1905* (New York: Harper & Row, 1985), 170, 180, 189, 207.ピーバディーの略歴は、http://venn.lib.cam.ac.uk/Documents/acad/enter.html. にある*A Cambridge Alumni Database*で検索できる。ジョセフ・ピーバディーについては、Jim Sterba, *Frankie's Place: A Love Story* (New York: Atlantic Books, 2004), 153.を参照。グロトンとJ・P・モルガン1世については、Ron Chernow, *The House of Morgan: An American Banking Dynasty and the Rise of Modern Finance* (New York: Simon & Schuster, 1990), 50.

4) W. Averrell Harriman Papers, "Groton School, Groton, Mass., 1904-1909," Box 7, Library of Congress, Washington, D.C.

大学時代ボート部で親交を深めた。第2次世界大戦中から冷戦期（アチソンは1960年代、ハリマンは1980年代初めまで）米国の世界戦略と外交を支えたのであった。

アチソン（1905年入学、1911年卒業）は、後述するロバート・マコーミックと同様、グロトンになじまかった。アチソンの両親は、カナダからの移民で、父親のエドワード・アチソンは、ウェスリアン大学のあるコネチカット州ウォーターベリーの英国聖公会の牧師をつとめていた。母親エレノアの父親ジョージ・グッダーハムはカナダのトロント市で製粉業とウィスキーの酒造業で大成功した実業家であった。ディーン・アチソンが米国屈指の教育を受けられたのは、彼女が父親から受け取った経済的援助と遺産のおかげであった。そもそもアチソン一家が中流の上の生活水準が可能であったのは、この母親の資産に負っていた。

両親がカナダからの移民でもあったためか、ディーンは、母親が大英帝国と英国王室を称えることをよく耳にした。また、父親は、英国聖公会が英国王室により始まったせいか、毎年ビクトリア女王の誕生日は一家で祝い、教会の敷地では英国国旗を掲げ、「女王陛下に乾杯」と祝ったのであった。

アチソンは、ルーズベルトとマコーミックと違い、また、グルーと同様、社会人になる前にアジアを旅行していた。アチソンは、イェール大学の卒業旅行（1915年）で、同期生たち5人とともに横浜や京都など日本を観光していた。当時、欧州が大戦のさなかであったため、日本を選んだのであった。横浜でどのような遊びを行ったのかは、未だ公開されていない同期生たちとともに旅行中書いた日記の別冊に秘められているかもしれない。アチソンは、日本へ向かう途中と帰国の折、妹が在学していたウェルズリー大学の親友アリス・スタンレーの実家を訪問していた。彼女の父親は弁護士として成功していたが、アチソンと彼女の交際は、1年ほど途絶えがちであった。グロトンでは、ピーバディー牧師のスパルタ式の教育に反抗し続けたことから、睨まれていたことも手伝って成績は、同期生24人中最下位であった（ちなみに、アチソンは、父親からも反抗する子供として睨まれ、彼にとっての生涯にわたるジレンマは父親になかなか自分の考えを認めてもらえないという悩みであった）。イェール大学では、社交とボート部に励み成績は「可」であったアチソンは、来日した時点では、周囲はもちろんのこと、彼自身ものちに米国外交の中枢で活躍するとは夢にも思わなかったであろう。彼にとっての人生の転機は、ハーバード大学法科大学院2年目のときであった。まず、のちに最高裁判事となるフィーリックス・フランクフッター教授の授業を受講して法律の勉強にすっかり夢中になったのであった。そして2年目の終わりに、大学卒業を控えたアリスと結婚したことであった。法科大学院1年目の成績は、イェール大学時代と同様ぱっとしなかったが、2年目と卒業した3年目は急上昇し、アチソンは、法科大学院を首席で卒業したのであった。卒業すると、アチソンはフランクフッター教授の推薦で、ルイス・ブランダイスという、当時米国史上はじめてユダヤ人で最高裁判事になった法律家のもとでアシスタントをつとめた。アチソンはこのあとワシントンDCの大手弁護士事務所に採用され、弁護士として成功した。[5)]

---

5) James Chase, *Acheson: The Secretary of State who Created the American Century* (New York: Simon & Schuster, 1998), 16-20, 445ft22, 40; Robert J. MacMahon, *Dean Acheson and the Creation of an American World Order* (Washington, D.C.: Potomac Books, 2004), 5-16.

本書には登場していないが、大統領就任後のルーズベルトと政敵となった新聞王で超保守主義の孤立主義者ロバート・マコーミックもグロトンの出身であった。

ロバート・M・マコーミックは、シカゴの名門マコーミック家（祖父の兄が農業に革命をもたらした耕作機械マコーミック・リーパーを発明）の二男に生まれ、1910年にシカゴ・トリビューン紙などを刊行するトリビューン社の経営権を、従兄のジョセフ・M・パターソン（高校と大学の2期上の先輩）とともに、創業家2代目であったパターソンの父親から継承した。マコーミックは、この従兄とともに1914年に社主となり、死去した1955年まで同職をつとめた。同社は、マコーミックの経営手腕で全米一の発行部数を誇る新聞社に成長したのであった。（パターソンは、マコーミックと経営方針で対立して、同社を退き、1919年に、トリビューン社が出資したニューヨークの大衆紙ニューヨーク・デイリー・ニューズを創刊し、大成功する。）

第1次世界大戦に米国が参戦したさい、マコーミックは、パーシング将軍へ直接働きかけ、また、連邦下院議員であった弟が根回しを行うことで、パーシング将軍のスタッフとして情報将校の大尉に任ぜられた。これを振り出しに、砲兵連隊長などをつとめ、終戦の夏には大佐に昇進していた。マコーミックがパーシングに近づいた理由は、本人の冒険心とともに、彼の新聞社の情報源の確保であった。

マコーミックは、イェール大学を1903年に卒業後、シカゴ市で、革新主義運動に参画し、市の大手弁護士事務所の創設に同事務所の経営パートナーとして関わりながら市の公衆衛生の向上などに貢献していた。

マコーミックの編集方針は、反共主義、反社会主義、反ニューディール、反英国帝国主義、反国際連盟、反国際連合、西半球における専守防衛、シカゴの闇組織（マフィア）撲滅、反禁酒法といった内容であった。父親が外交官であったため、1893年までの4年間英国で過ごしたが、英国なまりの英語を話し、ポロやキツネ狩りなど英国ジェントリーの生活様式を好むものの、大の英国嫌いで知られていた。ちなみに、シカゴにおけるマコーミックとライバル関係にあり、民主党よりの編集方針を反映していた新聞社の社主は、日米戦争開戦時に海軍長官であったフランク・ノックス大佐であった。[6)]

グルーは、1920年代半ばと第2次世界大戦終結までの約8カ月間国務次官をつとめた。前者の時期は、本書37頁から38頁などで考察している省内の叩き上げで老練な（しかも庶民的であった）ウィルバー・カーに国務省の制度改革で主導権を握られてしまい、また、本書40頁から42頁で言及されているように田舎の弁護士フランク・ケロッグ国務長官には、前任者の国務次官と疎んじられていた。廣部が「あとがき」で考察しているように、戦間期のグルーは、国務次官としては、能力を十分に発揮していなかったかもしれない。この見解はハインリックスも同感であろう。しかし、これは、終戦時におけるグルーの国務次官としての役割と比較して、国務長官との人間関係と経験の蓄積が重要で、本人が駐トルコ大使、駐日大使といった2国間関係は得意でも、複数問題を同時に手掛けるのが下手であったような評価まではできるのであろうか。38頁のグルーのヒュー・ウィルソンに対する厳しい評価は、その根底にグロトン教育が唱えるような発想が、グルーの標

---

6) Richard Norton Smith, *The Colonel: The Life and Legend of Robert R. McCormick* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1997), 52-54, Chapter 7.

榜した国務省改革に反映されたとも言えるのではなかろうか。

日米開戦の引き金となったのが、日本の南仏印進駐に対する在米日本資産の全面的凍結と対日石油供給全面禁輸であった。本書 151 頁から 170 頁では、ロバート・フィアリー（グルーの方針で当時秘書を努めたグロトンとハーバードの後輩）の回想を利用しながら、近衛文麿首相が懸命に行おうとした日米首脳会談を側面支援したグルーの行動が詳細に記されている。1942 年 8 月下旬、グルーは、自身の回想録でも触れているように、もしも日米首脳会談が 1941 年 8 月か 9 月に行われていれば日米戦争は回避できたとする報告書をハル国務長官へ提出していた。この内容は、本書 220 頁から 221 頁で紹介されているように、ハルの逆鱗に触れ、いまだにこの文書のありかがわからない。一方、グルーは、省内に留まり、しかも昇格していった。どうしてこのような展開となったのかはいまだ不明な点が多いが仮説を後述する。

本書は、グルーと岸信介がゴルフ仲間であったことを 96 頁で紹介している。また、日米開戦後のグルーの大使館内外における活動と日本の政財界の友人たちとの関係について大変興味深い記述を 207 頁や 208 頁などで行っている。1942 年 3 月に岸が、デンマーク大使夫人経由でゴルフに誘ってきたのは、岸の知るか知らぬところで日本の工作機関が行おうとした罠であったのか。グルーはこの誘いを断っているし、真相はいまだ謎である（なお、小さなミスプリであるが、武見太郎は、グルーと親しかった牧野信顕や吉田茂の親類ではあったが、牧野の娘が妻ではなかったように思う）。

日米開戦直前のルーズベルトの天皇への親電の遅延の問題（本書 191 頁から 192 頁）であるが、紙幅の問題がなければ、ここは最近の議論や駐日米国大使館の機密電文が日本による暗号解読の対象になっていたことを紹介できたかもしれない。[7)]

本書 258 頁から 259 頁や 272 頁から 276 頁では、終戦時米国政府内で展開した無条件降伏は天皇制の廃止を必ずしも意味するものではないことを日本に明示するかどうかという政策論争を考察している。肯定論者のグルーは、強硬な反対論者であったアチソンとそのイェール大学同期生であったアーチボルト・マクリーシュと国務省内で激しく対立した。本書は 232 頁から 234 頁でホーンベックにかわってグルーの影響力が拡大した経緯をよく描いており、この流れとハルが国務長官を辞任してその後任がステティニアスとなったため（本書 242 頁）にこそ無条件降伏を修正しようとする試みが国務省内で可能となった。

1945 年 6 月 29 日のギャラップ社の天皇に関する米国内世論調査が物語るように、7 パーセントのみが天皇の免罪もしくは天皇を利用することによる占領を支持し、33 パーセントは天皇の処刑を望み、37 パーセントは天皇の訴追、終身刑あるいは流刑を望んでいた。このような状況下で、新しく国務長官に就任したジェームズ・バーンズは、世論に敏感であることも貢献して、5 月 28 日大統領宛グルー覚書に反対したアチソン（天皇に対して厳しい見解が圧倒的多数であった対連邦議会連絡係を担当）およびマクリーシュ両国務次官補を支持し、天皇制の存続の可能性を日本に明示することに反対する姿勢を 7 月 3 日グルーとの会談で明確にした。トルーマンもバーンズも米国内世論と日本が天皇存置以外の要求をいろいろと行うことを警戒したのである。こうしてポツダム宣言には、天皇存置は明示されず、間接的な表現に止まったのである。

[7)] 小谷賢『日本のインテリジェンス――なぜ情報が生かされないのか』講談社, 2007 年。Takeo Iguchi, *Demystifying Pearl Harbor: A New Perspective from Japan* (Tokyo: I-House Press , 2010).

本書は、ドイツ降伏後の天皇存置を巡る米国政府内の議論におけるグルーの考えと行動をよく紹介している。ただ、5 月 29 日の会議（261 頁）で天皇存置の可能性について日本へ明示するかどうかの判断を先送りした理由として原爆開発が取り上げられているが、このほか沖縄戦がまだ終わっていなかったことも出席したグルーをはじめとする政策決定者たちの脳裏にあったものと思われる。

本書 263 頁では、グルーの動向について当時の朝日新聞が国内で報道していたという興味深い記事を紹介しているが、実は、5 月中旬のトルーマン大統領とフーバー元大統領が会談していたことも報道していた。むろんその内容までは日本側は把握していなかった。しかし、フーバーは、ソ連の対日参戦前に日本と和平に漕ぎつけることで、欧州でソ連が勢力拡大を図ったことに成功した事態をアジア・太平洋地域でも実現させたくないと考えていた。このようなフーバーの対ソ観は1945年8月6日朝日新聞の二面でも紹介されていた。当時米国内外では報道されていなかったが、5 月中旬フーバーはトルーマン大統領と会談してこの持論を展開し、日本に対して無条件降伏は天皇制廃止を意味するものではないことを示すべきであると進言していたのであった。フーバーは、そうすることで日本の降伏を促すことができるかもしれないと考えていたのであった。本書が語るように、グルーは、海軍長官ジェームズ・フォレスタル、そして陸軍長官ヘンリー・スティムソンがフーバーのこうした見解に同調していることを認識しており、米国政府内でこうした見解に基づいて無条件降伏の内容を日本に明示しようと試みる国務省内の中心的役割を果たしたのであった。[8)]

本書はこうした対日政策におけるグルーの役割をよく考察している一方、266 頁から 267 頁が示すように、米国のドゴールへの対応など、第 2 次世界大戦末期の欧州情勢に対するグルーの対応もバランスよく描いている。また、本書 279 頁では、ハル元国務長官の天皇存置に対する見解をバーンズ国務長官が求めていたこと、そして、その見解の内容を紹介しており、日米開戦直前のハル・ノートのように原則論を強調したハルが戦争末期の無条件降伏を

---

8) May 8, 1945, Henry L. Stimson Diary; Yale University, New Haven, Conn.; March 9 and May 29, 1945, William R. Castle, Jr., Diary, Vol. 49, Harvard University, Houghton Library, Cambridge, Mass.; Castle to Hoover, May 2 and June 2, 1945, "Castle, William R.," and Hoover to Stimson, May 15, 1945, "Stimson, Henry L., Correspondence 1945-1950," Box 223, Post-Presidential Individual File (以下 PPI), Herbert C. Hoover Papers, Herbert C. Hoover Presidential Library, West Branch, Iowa; "Miscellaneous," Box 1, "Atomic Bomb File," Box 2, Eugene Dooman Papers, Hoover Institution Archives, Stanford Unviersity; Timothy Walch and Dwight M. Miller, *Herbert Hoover and Harry S. Truman: A Documentay History* (Worland, Wyoming: High Plains Publishing Company, 1992), 41-43, 50-54; Joan Hoff Wilson, "Herbet Hoover's Plan for Ending the Second World War," *International History Review* 1 (Jan. 1979): 87-88, 94, 101-102; Richard Norton Smith, *Uncommon Man: The Triumph of Herbert Hoover* (Worland, Wyoming: High Plains Publishing Company, 1984), 342-48; Walter Millis, ed., *The Forrestal Diaries* (New York: The Viking Press, 1951), 52-53; Walter LaFeber, *The Clash: U.S.-Japan Relations Throughout History* (New York: W.W. Norton, 1997), 23, 38, 243-46; Townsend Hoopes and Douglas Brinkley, *Driven Patriot: The Life and Times of James Forrestal* (New York: Vintage Books, 1992), 208; James Chace, *Acheson*, 106-107, 113-14; Heinrichs, *American Ambassador*, 154, 364-80; Minutes Meeting Committee of Three, June 12, 1945, Folder 4, Box WD 1, Series 8, War Department, John J. McCloy Papers, Amherst College Archives, in Rudolf V.A. Janssens, "*What Future for Japan?: U.S.Wartime Planning for the Postwar Era, 1942-1945* (Amsterdam: Rodopi, 1995), 293.

めぐる政策論争に与えた影響を想像させてくれる。299 頁では、退官後のグルーのバーンズをはじめとする天皇存置に反対した人たちへの痛烈な批判が紹介されており面白い。

グロトンにおける教育的影響とグルーの出自を考えると、グルーが天皇存置を唱えたのは、むろん対ソ戦略と日本の早期降伏が最大の理由であるが、もともと権威主義的な秩序に理解を示していたためであったと言えるのではないか。つまり、10 年におよぶ滞日生活で、米国東海岸の支配階層のネットワークのなかで育ったグルーが、このようなネットワークの日本版を構築したことで、天皇制の軍国主義的な面を拒絶しつつ、そうでない側面を肯定していったのではなかろうか。一方、トルーマン、バーンズ、アチソンたちは、米国世論に敏感であったのみならず、権威主義的な存在を疎んじた。トルーマンとバーンズがこうした見解を持つ典型的な米国人であるとするならば、アチソンは、前述の生い立ちからして権威主義的な父親とピーバディー校長との対立が、権威主義的な存在に距離を置かせる習性をもたらしたのであったかもしれない。

紙幅の関係で紹介できなかったのではないかと思われるが、1945 年半ば国務省内を揺るがした、後に国務省内の赤狩の起源となるアマレジア事件とジョン・サービスへの対処、オーエン・ラティモアが戦時中展開した国務省内知日派への批判、ドイツ降伏後の米国連邦議会内における無条件降伏の内容を問いただす動きに触れることで、グルーの天皇存置と反共産主義や国務省内の親中派と知日派との政策的対立の考察をより濃密にできたかもしれない。特にはじめの 2 つは、本書が紹介しているコールグローブと行った 1950 年代の反共啓蒙活動と関係しているからである。

そのコールグローブは、1946 年春、本書 306 頁から 307 頁で紹介しているように、グルーの終戦時の活動を樺山愛輔、吉田茂、牧野信顕、そして昭和天皇に知らせることとなり、昭和天皇はグルー夫妻に、極東軍事裁判前の微妙な時期であったにも拘わず、贈り物を送ったのであった。

最後に、本書 242 頁で、ハル国務長官の後任人事について、ルーズベルトは、1937 年から 1943 年夏まで彼の側近として国務次官を務めたサムナー・ウェルズを検討していたという興味深い指摘をしている。本書 76 頁から 77 頁で紹介しているように、ウェルズは、グルーとルーズベルトのグロトンおよびハーバードの後輩であった。なぜグルーが戦時中ハルの逆鱗に触れたにも拘わらず国務省内で影響力を拡大していったのかは、彼とルーズベルトの関係のみならず、国務省内におけるハルとウェルズの熾烈なライバル関係のなかで、長く海外にいて双方が受け入れられる「部外者」であったことも関係していたのかもしれない。紙幅の都合で本書はこのライバル関係が災いしてなぜウェルズが失脚したのかについて触れていない。ウェルズは、グロトンで、アチソンより一期上の先輩にあたり、アチソンは、自身の回想録で、ウェルズの頭脳の明晰さを称賛している。ウェルズは、ニューヨーク市の名門一族に生まれ、彼のマンハッタンの実家とエレノア・ルーズベルトの実家は、ウェルズの少年時代まで家族ぐるみの近所付き合いという親密な間柄であった。エレノアの弟とウェルズは、グロトンとハーバードで在学期間が重なっており、エレノアとフランクリン・ルーズベルトの結婚式で、ウェルズは、花嫁付添人を務めた。フランクリン・ルーズベルトと同様、ウェルズは、コロンビア大学の法科大学院を卒業した。彼が選んだ職業は、外交官の道であった。第 1 次世界大戦中在日米国大使館に勤務したのち、ウェルズは、1920 年代から 1930 年代前半、米国の対ラテン・アメリカ／カリブ

海地域政策で活躍し、キューバ大使や国務次官補などを歴任した。ルーズベルト大統領の意向でウェルズが国務次官に就任すると、本書でも紹介しているように、国務次官が国務長官を頭越しに大統領と外交政策を相談することが目立つようになり、これがハルとホーンベックとの関係を緊密にさせていった。米国のグローバルな外交戦略と西半球における米国外交という米国外交の中核ともいうべき政策領域で、ウェルズは能力を発揮した。このことと、ウェルズの離婚後の結婚相手がワシントン市内に現存するコスモス・クラブの当時持ち主・入居者であったワシントン社交界きっての婦人として知られていたことも、テネシー州出身でワシントン市内の中の上程度のマンションに住む典型的な米国人政府高官ハルにとってウェルズを疎むべき事態を助長したかもしれない。1940 年に、大統領の国内視察に同行したウェルズが、車中泥酔状態になって複数の黒人のボーイに性行為を求めて断わられる醜態を起こしたさい、ルーズベルト大統領の指示で、この事件はいったんは隠ぺいされた。しかし、国務省内のハルとウェルズを軸とした対立が背景となってこの、隠ぺいはやがて漏えいされてゆき、この問題が連邦議会へ波及していくなか事態の鎮静化のため、ルーズベルト大統領は、ウェルズの辞任を求める苦渋の選択を 1943 年夏に行ったのであった。人事権で大きな権限を持つウェルズを抜きに、ルーズベルト政権発足して間もない時期政権と対立して財務省を去っていたアチソンを 1941 年 1 月国務次官補へ登用したり、グルーが帰国後国務省内で影響力を拡大していったことを語ることはできない。あと、ウェルズがスキャンダルを起こしていなければ、国務長官に就任していたかもしれないので、その場合、ウェルズ国務長官とグルー国務次官が無条件降伏の問題でより効果的な対応を行えたのか。トルーマンが大統領になってウェルズに代わってバーンズが就任していたのか。歴史上の「もしも」を考える上でもこうしたウェルズ関係の検証すべき研究課題が残されている。[9)]

以上考察したように、本書は、日米関係とアメリカ政治外交史、特に満洲事変から終戦までの時期を理解する上で、一般読者にとっては読むべき本であり、こうした分野を研究する人々にとっては読まなければならない書物である。

---

9) このエピソードやアマレジア事件とジョン・サービスへの対処、オーエン・ラティモアが戦時中展開した国務省内知日派への批判は、拙著にも詳しい。“Kenneth Colegrove and Oyama Ikuo,” *Doshisha American Studies,* No. 46（2010）: 83-108. Dean Acheson, *Present at the Creation: My Years in the State Department* (New York: W. W. Norton, 1969), 11-12, 73.ウェルズについては、ウェルズの息子による伝記 Benjamin Welles, *Sumner Welles: FDR's Global Strategist, a Biography* (New York: Palgrave Macmillan, 1997), 1-3, 9, 125-26, 138, 140-42, 272 を参照。このほか、ベンジャミン・ウェルズに関する次の死亡欄を参照。Celestine Bohlen, “Benjamin Welles, Biographer and Journalist, Is Dead at 85,” *New York Times,* January 4, 2002. この記事を書いたのは、ソ連の専門家故チャールズ・ボーレン国連大使の娘であった。チャールズ・ボーレンは、本書 196 頁などで紹介されているように日米開戦時グルーの部下であった。そもそもボーレンが国務省に入れたのは、当時国務次官であったグルーの鶴の一声のためであった。面接試験に現れたボーレンは、禁酒法時代であったにも拘わらずジンの匂いを漂わせながら現れ、グルーを除いた面接官たちは異口同音に不謹慎な人物であるとして不採用を唱えていたが、グルーは、ジンの匂いを漂わせていたにも拘わらずこの若者を見込んだのであった。Walter Isaacson and Evan Thomas, *The Wise Men: Six Friends and the World They Made* (New York: Simon & Schuster, 1997), 141.